

災害伝承活動に関する先進事例からの学びと 石巻地方における課題

— 「震災学習協働事業体制づくり」コンファレンスの取組み— Learning Workshop on Disaster Tradition from Exciting Projects and Problems in Ishinomaki City, Higashimatsushima City and Onagawa Town: Conferences on “Organization for Collaboration on Disaster Learning Business”

○佐藤 翔輔¹, 中川 政治², 浅利 満理子², 今村 文彦¹
Shosuke SATO¹, Masaharu NAKAGAWA², Mariko ASARI² and
Fumihiko IMAMURA¹

¹ 東北大学 災害科学国際研究所

International Research Institute of Disaster Science, Tohoku University

² 公益社団法人みらいサポート石巻

Ishinomaki Future Support Association

It is important to share memories of disaster experience in affected areas to others. There are many disaster experience telling activities, affected area guide programs and exhibition facilities in Ishinomaki, Higashimatsushima and Onagawa, Miyagi Prefecture where damaged in the 2011 Great East Japan Earthquake disaster. However, number of visitors that use the programs and facilities decreased after five years of the disaster occurring. We have conducted the conferences to share each program situations and problems, to learn existing program in areas affected by past disasters, and to discuss potential of their collaboration on disaster learning business.

Key Words : disaster tradition, disaster learning, workshop, the 2011 Great East Japan Earthquake Disaster

1. はじめに

石巻市は東日本大震災で最大の被害を受けた被災地であり、震災学習を意図する事業や計画が特に多いのが特徴的である。市は「石巻中央公民館」の近傍に「復興まちづくり情報交流館」を設置し、「石巻市南浜地区復興祈念公園（仮称）」「震災遺構（門脇小学校）」を構想中である。住民が「がんばろう！石巻の会（集いの場）」、みらいサポート石巻（NPO）が「つなぐ館」、石巻日日新聞社（地元新聞社）が「ニューゼ」等を設置しているほか、石巻観光協会や地域住民などが語り部活動を展開している。

東日本大震災から 4-5 年経過した段階では、このような施設や活動への利用者数に変化が見られている。たとえば、石巻観光協会の「学びの案内」利用者は、平成 26 年度から平成 27 年度にかけて 27,240 人から 20,921 人と約 7 千人減少している（図 1、私信）。一方で、1995 年阪神・淡路大震災や 2004 年新潟県中越地震災害の被災地では、震災発生から 10~20 年経過していてもなお、一定の利用者が存在しており、施設や活動の維持が図られている。

石巻地方における以上のような課題を解決するものとして、石巻地方において、東日本大震災の震災伝承の拠点間における交流・連携・学びを通じた、「協働事業体制づくり」が必要であるとの着想に至った。本稿は、石巻地方における震災伝承活動の協働事業体制づくりを念頭においたコンファレンスの取り組み経過や、工夫・成果について報告するものである。

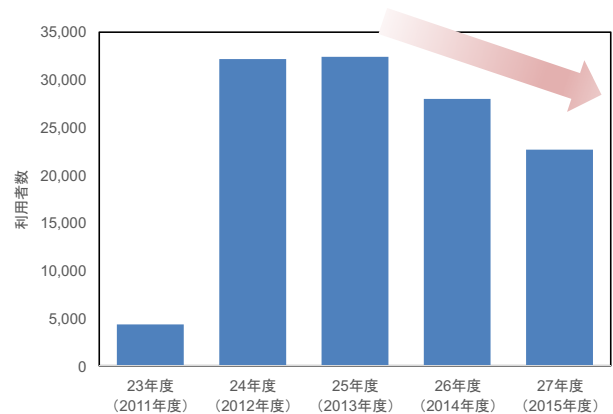


図 1 石巻地方における震災学習事業の利用者数

2. コンファレンスの全体構成

石巻地方における震災伝承活動の協働事業体制づくりに関するコンファレンスの全体構成を図 2 に示す。同コンファレンスの最終的なゴールは、同協働事業体制づくりにある。そこに至る前に、複数回のコンファレンス（ワークショップ）を設計している。中でも、最も初めに行う大きな 3 つの取り組みとして、1) 神戸視察、2) 新潟視察、3) 第 1 回コンファレンスがある。前 2 つの視察は、「先進事例に学ぶこと」を目的に行うものであり、同コンファレンスの最も大きなインプットとして位置づけている。第 1 回コンファレンスは、「互いを知ること」を目的に行うものであり、石巻地方内における語り部、被災地ガイド、展示施設といった震災伝承の取組

みの紹介について、対外的な発信の意図も込めて、シンポジウム形式で行ったものである。なお、第1回コンファレンスでは、石巻地方におけるすべての震災伝承活動の取り組みを紹介しきれなかったため、第2回コンファレンスの冒頭でも一部継続して行った。第2回コンファレンス以降は、視察やコンファレンスで得られた情報をもとに、議論をワークショップ形式で進めていった。

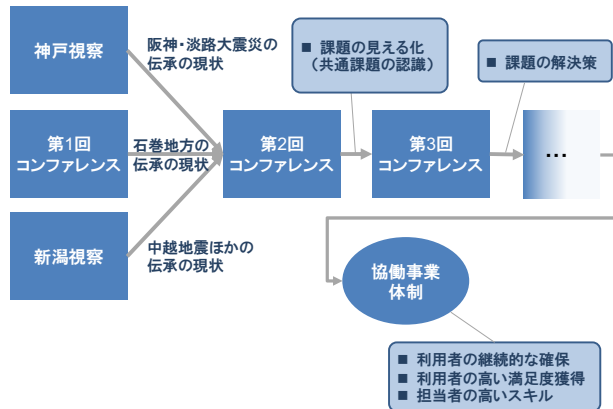


図2 コンファレンスの全体構成

3. 視察

ここでは、全2回の視察の概要について述べる。

(1) 神戸視察

神戸視察（2015年10月21日～22日、1泊2日）における行程を以下に示す。参加者は石巻地方において震災伝承に関わる官民学8名であった。なお、行程のアレンジにおいては、人と防災未来センター研究員・石原凌河氏（※当時）の協力を得た。視察の様子を写真1に示す。

1日目（会場：人と防災未来センター）

- 1) 人と防災未来センターの概要説明（人と防災未来センター 研究部長 村田昌彦氏 ※当時）
- 2) 神戸市の震災記録動画のデジタル化と活用（神戸市役所 松崎太亮氏）
- 3) 語り部による講話（人と防災未来センター語り部 谷川三郎氏 ※元芦屋市職員）
- 4) 人と防災未来センター展示見学（人と防災未来センター 研究員 石原凌河氏 ※当時）
- 5) 資料室の概要説明（人と防災未来センター 資料室 村上しほり氏）
- 6) 収蔵庫の見学と解説（同上）

2日目

- 1) 東遊園地・神戸港震災メモリアルパークの紹介（人と防災未来センター 研究員 石原凌河氏 ※当時）
- 2) 神戸市立地域人材支援センターにおける震災体験学習の紹介（神戸市立地域人材支援センター 山住勝利氏）
- 3) 野田北部・たかとり震災資料室の紹介と見学（野田北ふるさとネット 事務局長 河合節二氏）

(2) 新潟視察

新潟視察（2016年1月16日～17日、1泊2日）における行程を以下に示す。参加者は石巻地方において震災伝承に関わる官民学18名であった。なお、行程のアレンジにおいては、長岡震災アーカイブセンターきおくみらい研究員・山崎麻里子氏の協力を得た。視察の様子を写真1に示す。

1日目

- 1) 農家レストラン「多菜田」（代表 五十嵐なつ子氏）
- 2) やまこし復興交流館おらたる：施設見学と語り部講話（畔上凌氏、川上沙織氏、語り部・関静子氏）
- 3) 木籠メモリアルパーク及び郷見庵：見学と意見交換（）
- 4) 長岡震災アーカイブセンターきおくみらい：施設見学と意見交換（山の暮らし再生機構 理事長 山口壽道氏）

2日目

- 1) 妙見メモリアルパーク：見学（長岡震災アーカイブセンターきおくみらい 研究員 山崎麻里子氏）
- 2) おぢや震災ミュージアムそなえ館：見学と震災学習体験（細貝悠斗氏）
- 3) 川口きずな館：施設見学と意見交換（中林道泰氏、中村充氏）
- 4) 総合討論



写真1 神戸視察の様子



写真2 新潟視察の様子

4. コンファレンス

(1) 第1回コンファレンス

第1回のコンファレンス(写真3)は、各個人・団体の語り部・被災地ガイド・展示施設の活動内容について相互の紹介を行い、「互いを知る」「世間知ってもらおう」ことを目的として地元公民館(石巻中央公民館, 同市日和が丘)でオープンイベントとして開催した。発表者は市内の震災学習担当者のみならず、過去の被災地、市外の被災地で事業を行う個人や団体のほか、有識者にも登壇いただき、第1部に3例の基調講演、第2部に地元11団体からの活動紹介がなされ、約90名の参加を得た。



写真3 第1回コンファレンスの様子

紙調査(自由回答形式)で得た。これらレポートと自由回答について、データベースを作成し、これら自由に述べられたものは963件となった。第2回コンファレンスでは、これらの感想・意見をカード化し、これらをワークショップ形式で「課題」、「参考になること」「その他」への分類を行うとともに、内容の整理・構造化を行った(写真4, 図3)



写真4 第2回コンファレンスの様子

第1回コンファレンスのプログラムを以下に示す。

第1部

趣旨説明 東北大学災害科学国際研究所 佐藤翔輔
 「石巻市南浜地区復興記念公園(仮称)について」
 国土交通省 東北地方整備局
 東北国営公園事務所 所長 脇坂 隆一 氏
 「中越メモリアル回廊とその役割」
 公益財団法人山の暮らし再生機構 理事長 山口壽道氏
 「学びを通じた地域の課題解決」
 文部科学省生涯学習政策局
 社会教育課公民館振興係長 工藤松太郎氏

第2部

石巻市秘書広報課 課長補佐 佐々木 淳氏
 石巻観光ボランティアガイド協会 会長 齋藤 敏子氏
 石巻ニューゼ 館長 武内 宏之氏
 がんばろう!石巻の会 事務局長 黒澤健一氏
 一般社団法人 キャンナス東北 山田葉子氏
 永遠の南浜, 門脇 矢口清志氏
 一般社団法人 雄勝花物語 代表 徳水博志氏
 コンパクトシティいしのまき・街なか創生協議会
 阿部 紀代子氏
 石巻ビジターズ産業ネットワーク
 事務局長 大須 武則氏
 三陸河北新報社 営業局事業部長 庄司 清信氏
 公益社団法人 みらいサポート石巻
 専務理事 中川 政治

(2) 第2回コンファレンス

第2回のコンファレンスは、クローズドイベントとして開催し、第1回で事業を紹介した各個人・団体や、市担当部局、有識者を交えたワークショップ形式で行った。全2回の視察では、視察参加者にレポートの作成を課した。また、第1回コンファレンスの参加者にも第1回コンファレンスを終えて、石巻地方における震災伝承活動の感想や協働事業体制づくりに関するアイディアを質問

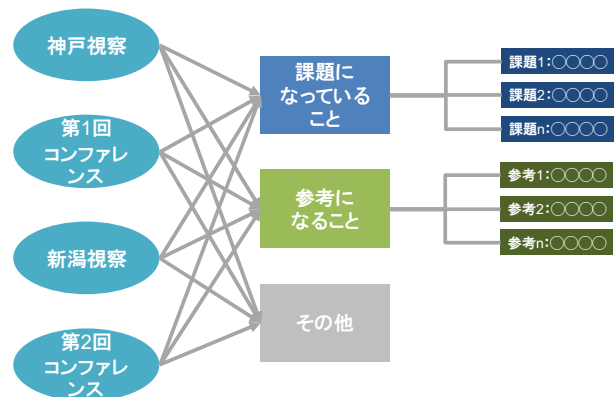


図3 第2回コンファレンスの流れ

表1 「課題」と「参考になること」の内訳

	神戸	中越	石巻	神戸・中越	神戸・石巻	中越・石巻	計
課題	2	51	33	0	0	2	88
課題かつ参考	3	10	0	0	1	1	15
参考	49	91	7	1	0	0	148
計	54	152	40	1	1	3	251

(3) 第3回コンファレンス

第3回コンファレンスは、第2回コンファレンスでの整理結果に対して、改めて確認・精査を行うとともに、第2回で整理された「課題」に対しての解決策を議論した。具体的には、第2回コンファレンス「参考になること」について、上記の「課題」を解決し得るものであれば対応させる。「参考になること」群の中に、「課題」を解決できそうなものがなければ、解決策のブレインス

トーミングを行った (図4)。

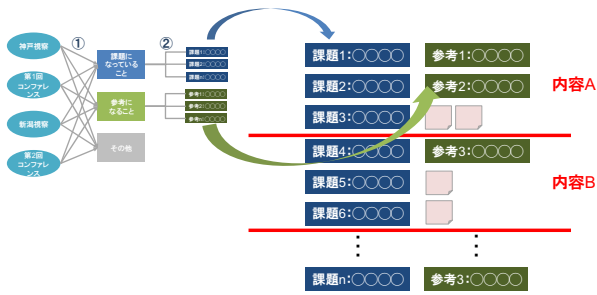


図4 第3回コンファレンスの流れ

5. 工夫・効果

本章では、同コンファレンスにおける工夫は次のとおりである：

- 1) 先進事例の視察による学び (生の刺激) : 「実物を見る」「生のものを体験する (生の刺激)」ことが、最大の学びであると捉え、対象地域の当事者 (参加者) による先進事例の地域の視察を実施した。
- 2) 学びの言語化 (レポート/アンケート) : 視察やコンファレンスで、それぞれの参加者は何らかの「学び」を得る。これを表出化・形式知化することによって、コンファレンス参加者全体の成果物にするために、レポートやアンケートにおいて、言語化を徹底し、データベース化した。
- 3) 地元メディアとの連携 : 地元メディアでの発信^{2) ~ 11)} : 河北新報 (宮城県を中心とする東北地方の新聞社)・3件、石巻かほく・7件、石巻日日新聞・10件、ラジオ石巻・複数回、朝日新聞・1件での発信となった。平成27年10月~平成28年2月の間にこれだけ多くのメディア発信がなされた。最初の3紙は、第1回コンファレンスの開催・参加について、広告掲載を申し込んだ以外については、各社が自発的に発信したものととなる。石巻日日新聞については、視察やコンファレンスを受けて、「中越巡礼 震災伝承を考える」という特集記事を7日間にわたって実施された。
- 4) 学びの可視化・共有 (合意形成の過程) : において、言語化された「学び」をカード化し、コンファレンス参加者全員で、このカードを用いて学びを整理・構造化することを行い、現状の課題認識や、今後のとるべき対策の合意形成を促進した。

本コンファレンスが契機となり、次のような効果は得られた。

- 1) ネットワーク創出・発展 : 石巻地方における東日本大震災に関連する震災学習事業を行う公的施設・個人・団体が対話を行うネットワークとして、石巻ビクターズ産業ネットワーク・震災伝承部会が構築された。
- 2) 石巻市震災伝承検討会議の設置 : 石巻市が、震災の記憶や教訓を風化させることなく、後世に伝えるため、震災伝承に向けた市の基本方針を基に、有識者、NPO、語り部等、行政による検討組織として「石巻市震災伝承検討会議」を設置した。この検討会議は、震災伝承のあり方や拠点となる施設の機能や整備内容を検討し、「石巻市震災伝承計画」を策定するものである。平成28年度から実際の活動が開始される。

今回のコンファレンスの実施は、前者の民間主体の組織、後者の市主催による官民学連携の組織といった、今後の同地域における震災伝承の方向性に大きな影響を及ぼすであろう2つの組織体が設置される大きな契機となった。

6. おわりに

本稿では、東日本大震災の最大の被災地である石巻地方において、震災が発生してから5年目の段階で、震災伝承の活動や施設の利用者が減少していることを受けて、石巻地方のける語り部、被災地ガイド、展示施設の関係者による協働事業体制づくりを念頭に置いたコンファレンスを実施している経過を報告した。加えて、コンファレンスにおける工夫や成果を述べた。

謝辞

本研究は、次の3つの助成を受けた。1) 日本学術振興会 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業・実社会対応プログラム「効果的・持続的な災害伝承を目的とした拠点構築手法のモデル化と実践的研究」(研究代表者:佐藤翔輔)、2) 文部科学省・平成27年度学びによる地域活性化プログラム普及・啓発事業、「地域内の連携・交流・学びを通じた震災学習の協働事業体制づくり」(実施責任者:佐藤翔輔)、3) 平成27年度東北大学災害科学国際研究所特定プロジェクト研究・拠点研究B「参加型アクションリサーチにもとづく災害アーカイブ学の探索」(研究代表者:佐藤翔輔)。コンファレンスの実施においては、石巻ビクターズ産業ネットワークの関係者、みらいサポート石巻のスタッフから多大なる協力を得た。また、資料の整理等においては、東北大学災害科学国際研究所技術補佐員の後藤さつき氏、早坂真紀氏、森實香純氏からのサポートを得た。

参考文献

- 1) 佐藤翔輔:「災害を伝える」活動の最新動向ー「災害かたりつぎ研究塾」の合宿活動をもとにしてー、口承文芸研究, No. 38, pp.42-51, 2015.3.
- 2) 河北新報社:震災5年 教訓の共有に意義 被災3県の語り部 全国各地で情報発信, 2016.3.13 朝刊
- 3) 石巻日日新聞社:中越巡礼① 震災伝承を考える 施設と公園のメモリアル回廊 知的観光拠点目指し展開, 2016.2.9
- 4) 石巻日日新聞社:中越巡礼② 震災伝承を考える ニーズに合わせたプログラム 一般客減るも団体客伸びる, 2016.2.10
- 5) 石巻日日新聞社:中越巡礼③ 震災伝承を考える 崩落現場の震災遺構 語り部の存在が不可欠, 2016.2.15
- 6) 石巻日日新聞社:中越巡礼④ 震災伝承を考える 震災と山の暮らし発信 若いスタッフも語り継ぐ, 2016.2.17
- 7) 石巻日日新聞社:中越巡礼⑤ 震災伝承を考える 水没した集落記憶伝える“残す”でなく“置いておく”保存, 2016.2.18
- 8) 石巻日日新聞社:中越巡礼⑥ 震災伝承を考える 生まれたつながり大切に 地域のための活性化拠点にも, 2016.2.19
- 9) 石巻日日新聞社:中越巡礼⑦完 震災伝承を考える 石巻地方に活かすヒント 広域周遊型で相乗効果期待 南浜の復興祈念公園が中核
- 10) 三陸河北新報社:震災学習協働業体制構築へ 石巻でコンファレンス 課題整理, 石巻かほく, 2016.1.27
- 11) 朝日新聞社:風化する災害教訓 どう残す, 2016.1.9 朝刊